

a 学校教育目標	みはらミライの挑戦 ーレッツ チャレンジー	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】(自校の使命) 子どもたちの未来を保障し、地域とともにある学校 【ビジョン】(自校の将来像) 自分の未来、愛するふるさとの未来を創る教育活動を創造する。
----------	-----------------------	----------------------	--

評価計画				自己評価					改善方針	学校関係者評価				
c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策等	f 評価項目・指標	g 目標値	10月	2月	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方針	l 評価			m コメント
					h 達成値	h 達成値					適正	不明	不適正	
確かな学力の育成	自ら考え、自ら学びに向う児童の育成	学び力の土台づくり(基礎・基本の定着)	桜山・柳の坂タイムによる基礎の反復や個別指導の充実	①国語科(漢字・学期末の平均)・算数科(学期末の平均)のテストで、90点以上の児童の割合(低学年)、80点以上の児童の割合(3年生以上) ②NRT各教科の標準偏差	①90%以上(低学年)80%以上(3年生以上) ②市平均+0.3ポイント	①1・2年生国語:82.8%算数:88.0%3年生以上国語:77.0%算数:82.3% ②103%	①1・2年生国語:92%算数:97.7%3年生以上国語:96.2%算数:91.4% ②103%	B	①3~6年生の算数以外は、目標を達成することができなかった。国語科では、特に知識技能の分野(漢字や語句や言葉など言葉に関する問題)に課題が見られた。算数科では、1・2年生で目標を達成することができなかった。基礎問題の反復や見直しの定着に課題が見られた。3~6年生では、目標を達成することができたが、70%台に達成率が留まった学級もある。四則計算等の積み重ねが定着しきっていないという課題がある。 ②NRTの標準偏差は市平均と比べて、国語科+1.1、算数科+2.2、理科+2.1という結果となり、どの教科でも0.3ポイント以上を達成することができた。	・国語科の漢字や語彙、算数科の四則計算の定着に向けて、アシストシートやプリントを活用し、桜山タイムでの反復学習を徹底する。さらに、問題を解いた後には見直しをすることを徹底する。 ・全ての児童を鍛えるために、担任と担任外の教員が連携して、組織的に学力補充の時間を実施する。 ・より効果的な指導方法を共有し、全職員で実施できるように、学年主任会で情報を交流する。また、児童が問題の情報を整理するために、どの教科においても、問題に線を引いたり印をつけたりする取組について実施状況を報告し合う。	○			○量をこなすよりは一つ一つの問題を確実に解かせたり、漢字等を覚えたりすることが大事である。授業での適用題をやりかたせて定着・理解の度合いを確認することも必要である。 ○改善方針の中に、保護者との情報共有があっても良いと思つた。学年として難しい学習なのか、自分の子供だけが苦手なのか、何ができていないのか等、把握していない家庭も多いと思う。家庭でしっかりと見て欲しい部分をすくーで配信することも一つの手段だと考える。 ○学習において反復学習は重要である。予習・学習・復習の中で、復習が重要であるというデータもあるため、復習にしっかりと力を入れている点は評価できる。
		学び力の向上	みはらミライの授業プランを活用した授業づくりや相互参観・研究授業の実施	①教師の見取り振り返り(R80)をもとに、思考が深まったり変容したりする児童の割合 ②児童アンケートにおける肯定的回答の割合 ③振り返り(R80)を書くことで、勉強がよく分かるようになった	①②80%	①66.7% ②84.5%	①83.3% ②105.6%	B	①教師の見取りでは、振り返りの中で児童の思考の変容や深まりはあまり見られないという結果となった。各教師がイメージする「児童の思考が変容したり深まったりした」具体の姿が共有できていないという点が課題である。 ②振り返りが自分の力を高めているということ、実感できている児童が80%を越えた。その中でも強い肯定を示した児童は、45.9%と過半数を超えることができた。	・授業の中で児童が深く思考することができるように、教師のファシリテートの技術を磨く。そのために、相互参観の視点の1つとして教師同士が学び合うことを実施したり、暮会でその良さを伝え合う場を設定したりする。 ・R80の質を向上させるために、月に2回以上の学年交流や学期に1回以上の研修を実施する。	○			
豊かな心の育成	生活指導項目の指導の徹底と体験活動の充実による豊かな心の育成	つながり力の向上	重点「あいさつ」指導について、児童会本部を中心としたあいさつ運動、縦割り班におけるあいさつ指導の充実	児童アンケートにおける肯定的評価の割合 「三原小あいさつレベル3(元気づけ・相手を見て・あいさつを返す)ができています」	90%	89.2%	99.1%	B	児童アンケート「元気づけ相手を見て挨拶を返すことができる」について、肯定的に評価した児童の割合は89.2%であった。また、学年別にみても、どの学年も肯定的に評価している児童は多い。しかし、教職員の見取りとしては、「もっと挨拶ができるようになってほしい」と思える児童が多いように感じている。委員会での挨拶運動の実施はしているが、継続的な効果は実感できていない。児童が継続的に挨拶ができるような環境をつくり、意識づけをしていく必要がある。	・校内で挨拶をしていく風土を育てるために、児童会本部役員や生活委員会主体の挨拶運動を毎月1週間ずつ実施する。 ・挨拶をすることへの意欲を高めるために、よく挨拶ができていない児童や学年を、挨拶運動の中で見つけ、その姿を放送で伝えていくようにする。 ・縦割り班での挨拶をより良くしていくために、縦割り班掃除において始めと終わりの挨拶をきちんとすることを、全職員で徹底する。	○			○何事も子供達の心に落ちる指導をお願いしたい。「あいさつは何故大切なか」を、子供達に考えさせながら、心のこもった形づくりを進めていきたい。 ○チャレンジするには素晴らしい活動だが、達成には意欲と数量が必要である。入学よりしっかりと取り組み。児童が三原小学校の仲間であることの自覚が待てるよう、その指導に期待している。
		仲間と深くつながる集団の育成	友達と関わり合い、認め合う集団づくりに向けた活動の充実 ①個々のよさを認め合う場の設定 ②SSTや構成的グループエンカウンター等の仲間づくり活動の充実	①児童アンケートにおける肯定的評価の割合 「お互いのよさを認め合い、全員で本気で挑戦するクラスになっている」 ②QUアンケート「学校生活意欲総合点」の分布において、28点以上の児童の割合	①②80%	①91.7% ②95.3%	①114.6% ②119.1%	A	児童アンケート「お互いのよさを認め合い、全員で本気で挑戦するクラスになっている」について、肯定的に評価した児童の割合は91.7%であった。QUアンケート「学校生活意欲総合点」について、肯定的に評価した児童の割合は95.3%であった。担任が日々細かに児童を見取り、各学年内で連携しながら取組を進めていったことで、「認め合う集団」へと成長してきている。しかし、児童を取り巻く人間関係の希薄化等、心の不安要素は多様化し、日々変化をしているため、その都度、連携をしながら対応していく必要がある。	・児童のレジリエンスを高めるための個別指導をするために、児童一人一人の個人面談を学期に2回以上実施し実態把握に努める。 ・仲間と共に達成感や自己有用感を味わい、集団としてのつながりを高めていくために、学年目標に基づいた月ごとの行動目標を設定し、子供たち自身が日々評価していく場を設定する。 ・自分自身の役割を自覚し、所属意識や自己有用感を実感できるように、縦割り班活動を活用した児童会本部企画の活動を学期に1回以上実施する。	○			○会議でも話題になったが、あいさつの意味をしっかりと伝えてほしい。あいさつは強要するものではなく、自然と出てくる環境を整えることが重要である。 ○学校の重点を知らない保護者に、一つの指導から誤解が生じる可能性がある。学校の重点項目を公開し、周知を徹底すべきである。
健やかな体	健康教育と教育活動の工夫による運動能力・体力の育成	自分力の土台づくり(運動習慣の定着)	①感覚づくりを意識した「三原小体操」の実施(体育の授業の導入時に) ②魅力的な わんぱくタイムの実施	①児童アンケートにおける肯定的評価の割合 「体を動かすことが好き」 ②わんぱくタイム(運動遊び)への参加率	①80% ②90%	①88.3% ②89.9%	①110.4% ②99.9%	B	児童アンケート「体を動かすことが好き」において、肯定的に評価した児童の割合は88.3%であった。また、わんぱくタイムのアンケートでは、その参加率は89.9%であった。学年別の結果は、低学年80.4%、中学年93.8%、高学年94.5%となっており、高学年の参加率が高い。低・中・高と学年を分けて行い、学年実態に応じた遊びにすることで、楽しく運動を行うことができたと考えられる。しかし、低学年の参加率は低く、「他にやりたいことがあった」と回答している児童も多いため、手立てが必要である。	・怪我なく運動ができる体を育成するために、授業内において「三原小体操」を行い、体幹を鍛える。 ・わんぱくタイムについて、全学年がしっかりと運動できるように、引き続き学年を分けて行い、運動ができる日程を増やしていく。 ・参加したいという意欲を高められるように、普段はできないような遊びや他の学年と遊べるといったわんぱくタイムの良さを活かした遊びを取り入れていく。	○			○「三原小体操」わんぱくタイム」「食育の推進」が確実に継続し、実践され、子供達の学校生活に定着していくことを期待する。 ○児童がさらに運動を好きになれるように、モルックのような小スペースで活動でき、協働して計算する必要のあるゲームを、わんぱくタイムでやってみても良いと思う。
		自分力の土台づくり(食習慣の定着)	栄養教諭と連携し、発達段階に応じた「食」に関する授業を全学年で実施	児童アンケートによる肯定的評価の割合 「自分の体のことを考えて、嫌いな物にも挑戦している」	80%	94.0%	117.5%	A	児童アンケート「自分の体のことを考えて、嫌いな物にも挑戦している」について、肯定的に評価した児童の割合は94%であった。給食委員会の完食への取り組みや給食放送、食育劇を通して、苦手な食べ物も一口は食べようとしている児童が増えた。今後も自分の体のことを考えてバランスよく食べるよう声を掛け続ける必要がある。	・アンケート結果100%を目指し、自分の体のことを考えることができる児童を育てていくために、引き続き、栄養教諭が給食時間に各学級を回り、バランスよく食べることの良さに関する話をしていく。また、給食委員会を中心に、苦手な食べ物にも一口チャレンジする(少しでも味わってみる)ことへの呼び掛けを行っていく。	○			○CSの活動の一環として、果実生や保護者が学校に入り、休憩時間に一緒に遊ぶことも有効であると考える。
信頼される学校	保護者・地域から信頼される学校づくり	自分力・ゆめ力・つながり力の向上	CSを活用した地域の強みを活かした活動の実施	児童アンケートによる肯定的評価の割合 「自分のよさを知っている」(自分力) 「三原のために自分の力を発揮したい」(ゆめ力) 「三原が好き」(つながり力)	80%	88.9%	111.1%	A	児童アンケートによる肯定的評価の割合は、「自分のよさを知っている」(自分力)82.1%、「三原のために自分の力を発揮したい」(ゆめ力)89.5%、「三原が好き」(つながり力)95.3%であった。CSを活用した学習活動を展開することで、児童と保護者、そして地域の方々に関わる機会が増えた。その結果、地域の方々や家族等の身の回りの人々に支えられていることを実感する機会が増えたと考えられる。今後も、CSを活用した授業や学校行事の中で、地域との繋がりを実感できるような取組を行っていく必要がある。	・つけたい力である「自分力・つながり力・ゆめ力」を高めていくために、引き続き、CSを活用した授業や学校行事において、児童が保護者や地域の方々に関われる機会を増やしていく。 ・CSを活用した活動の中でより効果的に3つの力を育成していくために、CSに関するカリキュラム・マネジメントを実施し、一つ一つの活動におけるつけたい力や必要な声掛けを明確にする。	○			○信頼される学校とは、「結果を出す学校」である。目標達成に向けて、日々の実践を積み重ねて欲しい。子供達のために進み続ける学校であるならば、地域や保護者は学校を信頼し、最大限の協力を惜しまない。4つの大切な力をしっかりと見える化できるように、これからも尽力していきたい。
		働き方改革(次世代の働き方への体制づくり)	計画的な時間外勤務の短縮業務改善の推進	時間外勤務月45h以下を6か月以上実施	—	—	—	—	—	現時点において、4月～8月の5ヶ月間で時間外勤務月45h以下になっている職員の割合は、100%:14人、80%:4人、60%:9人、40%:1人、20%:1人であった。時間外勤務が多い職員は主任の教諭及び初任の教諭であった。校内体制の見直しが必要である。	・業務改善に向けて、計画的・組織的に2学期の部の運営ができるように、夏季休業中の8月に複数回部会を開き見直しをもった。 ・部内での業務の平準化に向けて、主任への定期的な声掛けを実施する。 ・退校時刻を早めるめられるように、個に応じた声掛けをする。	○		

【j:自己評価 評価】
A:100≦(目標達成) B:80≦(ほぼ達成)<100 C:60≦(もう少し)<80 D:(できていない)<60

【l:学校関係者評価 評価】
イ:自己評価は適正である。 ハ:わからない。
ロ:自己評価は適正でない。